

教団新報

定 価 1部150円(本体137円+共214円)
予約購読料 1年分 千共 5,350円
紙代のみ 3,750円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 秋 山 徹
編集主筆 嶋 田 恵 悟
印刷所 株式会社きかんし

東日本大震災から10年を迎えて

「さあ、共に生きよう」との思いを抱いて

奥羽教区書記、下ノ橋教会牧師 松浦 裕介



ことは叶いませんでした。各教会・伝道所において、またそれぞれの生活の場において映像を通して祈りが合わせられました。

震災発生後間もない3月14日に開催された常置委員会の後、奥羽教区の基本姿勢の一つとして「被災教会への支援は、教会の判断を尊重する。救援物資、ボランティアの受け入れは教会の要請に応じて教区として募集する」との確認をしました。この背景には奥羽教

東日本大震災、メルトダウン・爆発事故を引き起こした東京電力福島第一原子力発電所事故から10年の時が経ちました。奥羽教区において毎年守られてきた東日本大震災を覚えての礼拝は、コロナ禍の中でオンライン配信の形となり、10年の時を覚えて一同が会する

区の歴史の中で度々起きてきた地震・津波被害への教区としての対応の積み重ねがあります。また、同じ岩手県内でも沿岸の被災地から約100キロ離れた盛岡に教区事務所がある地理的状況も関係していると言えます。各被災教会それぞれの状況の違いがある中で、奥羽教区においても三陸沿岸の津波被害、内陸の地震被害への支援活動が進められました。

支援活動が続ける中で、力や思いの至らなさを痛感しましたが、それ以上に多くの方々が覚え、祈り、支えてくださっていることを強く感じました。すべての方々のお名前は書き記せませんが、在日大韓基督教会、関東地方会、大韓イエス教長老会、東京教区北支区をはじめとする国内外の諸教会・伝道所の方々、チャイルド・ファンダ・ジャパンをはじめとする諸団体の方々、そして教区内の諸教会・伝道所の方々、お一人お一人がそれぞれの形で多様な被災

の現実にある人々に連帯し、共に生き、共に歩もうとしてくださいます。車に支援物資を積み込んで各被災教会へ向けて出発される方々を毎日見送った時の光景を忘れることが出来ません。また、奥羽教区として、北日本三教区による親子短期保養プログラムの実施に連なることができました。

題は「さあ、共に生きよう」でありましたが、この10年は三陸南地震(2003年)、岩手宮城内陸地震(2008年)と、数年ごとに大きな災害に見舞われ、最終年が近づいた2011年に東日本大震災を経験することとなりました。規模的には決して大きくない教会が繰り返し傷つき苦しみを負っていく現実の中で、「さあ、共に生きよう」との言葉を実践しようとする営みが奥羽教区で続けてこられたことを、今、想起しています。

「共に生きる」という言葉は多くの場面で用いられるのですが、その言葉の背後に様々な課題

や難しさを感じるものでもあります。しかし、共に生きようとする思いを抱いて歩む時、困難の中にあっても喜びや希望を分かち合うことが出来ることを知らされます。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しめ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです(一コリント12・26)との言葉が改めて心に響くもので

大震災から10年。あの出来事を経験した中から、隣人と共に生きることの意味を思い、共に生き続けていく志を新たにしながら、20年に向けた歩みを進めていきます。

共に苦しみ、共に喜ぶ、助け合える教区として

関東教区副議長、大宮教会牧師 熊江 秀一



続けています教会です。震災直後に訪問した時の会堂や教職・教会員の姿を思い起こしつつ、この10年の歩みを思い出しました。そして再建された会堂で、力強く宣教が行われている姿を、迎えてくださった教職・教会員から伺い、感謝であふれました。

また宇都宮教会で行われた、関東教区「東日本大震災から10年を覚える礼拝」では、同時配信で参加した教区の諸教会・伝道所と共に、御言葉を

東日本大震災から10年の2021年3月11日、教区四役の福島純雄議長、小池正造書記、飯塚拓也宣教部委員長と私で、伊勢崎教会、宇都宮上町教会、宇都宮教会を訪問しました。この3教会は東日本大震災で被災し、会堂再建を終えた後、今も教団借入金返済し

聞き、賛美をささげ、午後2時46分に合せて祈りをささげました。

震災では震度6強を経験した栃木地区、茨城地区、群馬地区。震度6弱を経験した埼玉地区、新潟地区(翌日の新潟・長野県境地震において)と関東教区のすべての地区が大きな揺れを経験し、31の教会・伝道所、11の教会付属幼稚園・保育園が重大な被害を受けました。しかし全国の教会、さらには世界各地の教会からの祈りと支えにより

再建を果たすことができました。一つ一つの被災した教会が深い戸惑いと困難の中から、再建するまでに、どれほどの祈りと支えがあったことでしょう。「涙とともに種を蒔く人は、喜びの声とともに刈り入れる」(詩編125・5)、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しめ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」(一コリント12・26)を経験する時で

被害が大きく、会堂や施設を取り壊して新会堂建築に取り組んだ教会は、伊勢崎教会(2014年3月23日献堂)、下館教会(2014年5月11日献堂)、宇都宮教会(2014年6月15日献堂)、宇都宮上町教会(2015年7月19日献堂)の順に再建し、水戸中央教会の2016年7月17日の献堂式をもって終了しました。また付属施設も2020年4月の宇都宮上町教会・みふみが認定こども園新園舎完成

によって終了しました。また7教会が教団の支援を受けて補修し、9教会・伝道所、4施設が教団の支援を受けずに自己補修をしました(お見舞いを差し上げました)。その間、教区東日本大震災支援委員会を45回開催し、再建・補修の支援、ボランティア派遣、被災地・被災教会で祈りを合わせ旅等を行いました。加えて41教会・施設への簡易診断派遣を行いました。その動きは2017年度より教区災害支援委員会として引き継がれています。

栃木地区のアジア学院への支援協力も大切な取り組みでした。世界に広がる支援もあり、コイノ

ニア棟、オイコス・チャペルを建築しました。また地域のセンターとして、一帯の土壌と農作物の放射能値の検出に取り組み、見事に再建されたことは教区の喜びでした。また教区として脱原発の声明や学習会にも取り組んできました。

震災後も教区内で「関東・東北豪雨」被災、また日本中で災害が起こっています。中越地震・中越沖地震、そして東日本大震災によって結ばれた主にある連帯を大切に、キリストのからだとして、宣教協力と今後予想される災害の時にも備え、助け合える教区として歩んで行きたいと思いを新たにしています。

東日本大震災を経て、聖書を読み進めて行く中で、アモス

書が「あの地震の二年前に、イスラエルについて示されたもの」(1・1)と語り始めていることに興味を湧いた。アモス書は何故、預言を地震と結び付けて記すのだろうか。▼アッシリアに滅ぼされる前の最後の繁栄を享受していた北王国では、文明の爛熟期にあつて、不正と偶像がはびこっていた。そのような中でアモスは、山々を造り、風を創造した神は、「地の聖なる高台を踏み越えられ」(4・13)方であると語った。しかし、偶像を凌駕する天地の創り主を示す言葉は民に届かず、アモスは活動を阻まれて行く。▼人間が偶像を拝む時、それが刻んだ像であると気づいていることは稀だ。むしろ、真の神を拝んでいると信じて疑わないで偶像礼拝に陥る。そこに、御言葉を聞き立ち返ることの難しさがある。アモス書は、高台のある地が揺るがされる経験を、人々が預言と真剣に向き合うきっかけになり得るものと受け止めたのではないだろうか。▼東日本大震災10年を迎えた。引き続き復興に向け祈りを合わせると共に、自らの中にある不正と偶像に向き合い、主に立ち返る時としたい。

新型コロナウイルス 感染拡大の渦中で

社会事業従事者の声に聞く

小羊学園《静岡県》

イエスに倣い、苦難に寄り添う

私の勤める小羊学園は重層的ハンディをもった方たちを対象として創業した福祉施設である。50余年を経て、幼児から高齢の者までを対象に入所施設やグループホーム、通園施設、通所施設が与えられ、短期入所や相談支援での関わりを含めると利用者は千人を超えるのではないだろうか。

利用者のすべてということではないが、多くの方たちは新型コロナウイルス感染のリスクを理解している。しかし、考えてみると、

今回の感染症によって多くの人たちの生活基盤が揺るがされ、亡くなる方もおられる。生活困難に陥る人たちの数も少なくない。生死を左右するような苦境に立たされる人々を支えるために待たされた対策が求められているのだと思う。

しかし、考えてみると、

第二平和保育園《千葉県》

御業があらわされていることに感謝



喜び、祈り、感謝する

昨年、新年度開始まもなく新型コロナウイルス感染拡大による第1回目の緊急事態宣言が発令され、千葉県内にある当保育園も登園自粛期間を経て休園措置となりました。

経験のない混乱と緊張が続く中で、保護者の就労によって保育を必要とする一部の子どもの安全・安心の確保をどのようにおこなっていくか、生命を預かる現場の責任を感じます。

緊急事態宣言解除後、少し遅めの新年度保育が始まった6月。イエスと保育者としての使命感で、毎日が無我夢中だったことを思い出します。

感染症対策について日々の生活を細かく見直し、子どもの活動が必要以上に制約されないようにしつつも密な状態を回避する工夫など、保育者間で多くの意見が交わされました。また長期間、家庭に留まる子どもの心身の状態や家庭の様子を電話で把握しながら、保育者の賜物を生かしたメッセージを動画配信するなど意欲的な取り組みにより笑顔と励ましを伝えることに努めました。子どもたちのために今できることを模索し実践する保育者の姿勢に神さまの導きを感じます。

あれから1年以上の月日が経ち、コロナウイルスは様々な変異を続けています。あの時感じた緊張と使命感は今も変わりません。

しかし、コロナと向き合い続ける日々の中で、子どもたちが変わらぬ希望をもち続け、感謝し、誰かを思ふ姿を通して、神様の御業があらわされていることに感謝し、この苦難の時だからこそ「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(一テサロニケ5・16〜18)とのみ言葉を常に立ち返りたいと思います。そして、神様から頂いた知恵と力をもって子どもたちに仕えるものでありたいと願っています。

(星野 牧報／松戸教会員)



コロナ禍の食事風景

起こすことはできないかも知れない。しかし、キリストとの出会いによって希望を与えられた者として、イエスに倣って苦

さんまクラブ《滋賀県》

子どもたちと毎日をエンジョイ

NPO法人さんまクラブは、滋賀県甲賀市で水口教会の青年が子どもたちの居場所づくりとして2013年に活動を開始し、現在は主に放課後児童クラブと障害児通所支援事業の放課後等デイサービスを全国的にも珍しいインクルーシブに同じ場所で一体的に運営しています。

ワクチン接種が進んできているとはいえ、まだまだ状況がよくなっていない中でコロナ禍を振り返るのもどうかとは思いますが、この「騒動」のなかで、一番大変だったのはなんといっても、2020年2月27日夕方突如として発表された「全国一斉休校要請」。安倍首相が思いつきでぶち上げたこのインパクトが一番でした。木曜日

夕方には報道され、週明け月曜日から3か月休校となったのです。それまで、感染対策の政策が後手後手になっていた政権のありせりなのかなのか知らないけれど、一番先に行動制限をかけられたのが子どもでした。この愚策によって子どもたちの大人に対する決定的な不信を植え付けてしまったと思います。

市からは結局ドタバタで月曜日の3月1日13時ごろになって、3月1日から市内の児童クラブは閉所とする決定的な連絡がありました。一方、放課後等デイサービスは国からの通達でできるだけ開けるよう県を通じて連絡がありました。私たちが大切にしていたインクルーシブな居場所は、「健康児」の児童クラブは休み

で、「障害児」の放課後等デイサービスは朝から開所という私たちが目指しているものとは逆のセパレートした結果となっていました。

とはいえ、子どもの感染伝播の力が弱いことや、重症化の確率が低いことが当初から言われていたもので、急に訪れた「大型連休」を思い切り楽しんでやれ！ということでは「スポーツの森」「鹿深夢の森公園」「余野公園」「野洲川」や駄菓子屋さんやたけのこほりなどへ毎日のように遊びに行きました。

安息日に麦の穂をつまみ食いたのをやんや言うてるファリサイ派のような人はこの時代にもたくさんいますが、子どもたちだけ厳しい大人にならないよう自戒して、のらりくらりファリサイ派をかわして子どもたちと毎日をエンジョイしていきたいと思っています。

(谷村耕太報／水口教会員)



上：さんまハウス
左：休校期間中のコマ



2021年度 1

教区総会報告

東海
教区

感染対策を施して実施、四役一新

第108回東海教区総会が5月25日から26日、池の平ホテル（長野県北佐久郡立科町）にて開催された。感染予防対策を実施した上で行われた開会礼拝では、宮本義弘議長による説教「務めを果たす」（二テモテ

4・15）が語られ、聖餐式が執行された。開会時出席議員は総議員数204名中91名。

議長報告において宮本議長は「東海教区五力年計画」の最終年であったことに触れ、「疫病下にあつて多くの集会が中止となり、主題の展開が十分でない一年であったことは否めない。しかし、5年間の歩みを通して、私たちは御言葉に聞く姿勢が整えられたという大きな成果を与えられた。折しも日本基督教団全体が疫病によって信仰が揺さぶられる中、東海教区では御言葉の響きの中に歩むことができたことを感謝している」と述べた。また、五力年計画を踏まえ、特に終末論的な

視点が現代において重要であることを考慮し、2021年度主題を『終わり』に向かう教会』とすることを示した。

二日間にあつた議事では、特に伝道委員長を含む四役選挙および常置委員選挙、准允式執行の件、教会設立の件が扱われた。

四役選挙結果
【議長】宇田真（岩村田）
【副議長】柳谷知之（松本）
【書記】新里正英（三島）
【伝道委員長】穴戸俊介（愛宕町）
常置委員選挙結果
【教職】石井佑二（遠州）、高橋爾（清水）、兵藤辰也（中遠）、宮本義弘（沼津）

新四役、
左から穴戸伝道委員長、柳谷副議長、
宇田議長、新里書記

【信徒】土屋芳子（長野県町）、稲松義人（遠州栄光）、新庄田鶴子（静岡草深）、山室設子（沼津大岡）
（新里正英報）

【信徒】土屋芳子（長野県町）、稲松義人（遠州栄光）、新庄田鶴子（静岡草深）、山室設子（沼津大岡）
（新里正英報）

【信徒】土屋芳子（長野県町）、稲松義人（遠州栄光）、新庄田鶴子（静岡草深）、山室設子（沼津大岡）
（新里正英報）

「障がい」を考える小委員会

ズームでの全国交流会開催を決定

6月10日、第5回委員会がズームを用いて開催された。協議では、主に「障がい」を考える全国交流会について話し合った。

新型コロナウイルス感染症拡大により教会を取り巻く状況が一変し、2020年10月に開催予定だった「第7回全国交流会」が中止となっ

た。今年は、昨年よりも新型コロナウイルスが拡大し、変異株も出現しているが、教会がオンラインでの会議や研修に慣れてきたこともあり、オンラインでの全国交流会開催の可能性を検討した。本来、全国交流会は、研修と交流の二本柱であるが、研修の部を中心に置くなら、オンラインでも

可能であるとの見通しが立ち、全国交流会開催を決定した。以下の事柄について確認した。

講師は津田望氏（社会福祉法人のゆり会理事長）。主題は「大人の発達障害の理解と対応」。日時：2021年10月4日（月）13時30分～17時。原則ズームでの参加をお願いする。ただし、サポートが必要なお方にもできるだけ希望に沿うよう、教団会議室での参加にも対応する。参加費は無料。案内は2021年6月下旬、各教区事務所に発送する。日本基督教団ホームページにも、案内を掲載する。

次回の委員会は、全国交流会後に行う。

（徳田宣義報）

「障がい」を考える小委員会よりのお知らせ
昨年10月中止となった第7回「障がい」を考える全国交流会は、10月4日（月）、オンライン講演会に変更して実施いたします。主題は「大人の発達障害の理解と対応」。詳しくは委員会記事をご覧ください。
委員長 竹村真知子

伝道委員会

「こころの友」文書応援伝道の発展に期待

第8回伝道委員会は、6月7日、オンライン会議形式にて行った。

本委員会が「こころの友」文書応援伝道について、3教会からの支援辞退の申し出があり、これを受け、近年、支援教会を持、発展させたいと考え

ている。支援を受ける教会からは、新来会者のために、地域の人のために、そして関係教育・福祉施設の利用者や職員のために「こころの友」が用いられていることが随時感謝と喜びをもって報告されている。

建築資金貸出金について、返済が滞っている貸出先に再度返済督促を行うこととした。当該教会（あるいは伝道所）単独での返済が困難な場合は、推薦教区に支援を要請するように促す。本制度の基盤となる諸教会・伝道

所の信頼関係を損なわせないよう、本委員会の意志と取り組みを確認した。

自由な懇談形式で、各委員が仕える教会や施設の感染防止対策とそれに付随する伝道上の課題を共有した。表面的な事象としては異なれど、同質の困難と向き合う友がいることに励まされつつ委員会を結んだ。
（村上恵理也報）

予算決算委員会

20年度決算、会議のオンライン化により経費減少

第8回予算決算委員会は6月18日に一部オンライン会議にて開催した。

秋山徹幹事より6月8日の責任役員会と臨時常議員会について、道家紀一総務幹事並びに大三島義孝財務幹事より事業活動等に関する報告があった。昨年延期となった新任教師オリエンテーションは、6月28・29日オンラインで実施される（本年度は8月実施予定）。

その後、20年度教団決算に関する件を扱った。経常会計の当期収支差額は1478万9525円の差益となったが、ズーム会議によるものが大きかった。しかし本事業業の状況を示す事業活動については収入が3億2957万2907円、支出は3億7671万6602円となり、収支は4714万3000

円の差損であった。これは救済対策基金として経常会計で管理していたものを特別会計に移し（6032万1977円）、また献金収入を「遺贈特別会計」として特別会計に（5000万円）移したためである。また常議員会費は当初予算1145万円に対し、605万2966円の決算であったが、これはズーム会議によるものが大きく、今後の会議の持ち方について一石を投じるものとも言える。

続いて、教団出版局決算に関する件を扱った。当初事業計画では売上高3億1700万円、売上総利益1億円、経常利益160万円を目標としていたがコロナ禍を受け、8月末実績による前年同月対比のうち、書籍は新刊売上が前年度比14%増

にもかわらず、70万円減、教会音楽400万円減、教会・広告500万円減、定期刊行物は200万円減となった。そのため下半期修正事業計画を策定、売上目標を3億300万円と下方修正した旨報告があった。委員会としては出版局経営改善検討チームによるデュオリジェンス報告書作成のためのコンサルト料が、出版局ではなく教団本体から拠出さ

事務局報



上野光隆（隠退教師）

21年6月13日逝去、104歳。宮城県生まれ。46年同志社大学卒業。47

年より京都、南大阪、今治、南大阪教会を牧会し、87年隠退。遺族は息・上野光彦さん。

齋藤正彦（隠退教師）

21年6月3日逝去、95

信徒伝道者異動
東海田 就 鄭 詩温

お詫び・訂正
教団新報4952号3面、事務局報欄、伝道所通信先・甲西「1709」を「709」にお詫びして訂正いたします。



21年6月4日逝去、80歳。東京都生まれ。65年日本聖書神学校卒業。同年より広島東部、下松愛隣、廿日市、ひばりが丘、谷村教会を牧会し、18年隠退。遺族は妻・深澤益枝さん。

深澤 馨（隠退教師）

伝 道 報 告

伝道の
TOMOSHIBI ともしび

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

賀川豊彦の働きを受け継いで

社会福祉法人イエス団理事／神戸イエス団教会牧師 上内 鏡子

イエス団の前身です。当時の地方新聞などにも取り上げられ、多くの人が賀川の働きに関心を寄せ、協力者も多く集まったようです。救霊団の活動は、礼拝や路傍伝道に限らず、診療所が開設され、子どもたちへのケアをしたり、滋養供給を目的としたり、一膳飯屋を開業、労働の場としての歯ブラシ工場なども展開したりしていました。

賀川の死後、『賀川豊彦全集』を発売した際には、差別的な思想の下に著された著作物も含まれており、賀川豊彦の差別性がクローズアップされ、イエス団自身もこの課題に取り組むことが求められました。1988年は賀川豊彦生誕百年、更に、1999年は、賀川豊彦献身90年を迎えて、賀川の差別性に向き合いつつ、イエス団が目指す働きの理念を「イエス団憲章」として発表しました。また、2009年12月24日の賀川豊彦献身百年では、原点回帰として、行政をはじめ、賀川に関係する協同組合や教育機関、キリスト教関係諸団体と協力して、その働きを見直す作業が進められました。法人イエス団は「イエス団憲章」の見直しを数年かけて実施し、献身百年に併せて「ミッションステートメント2009」をまとめました。これは、イエス団職員や、施設を利用する高齢者から子どもにまで、使命を広く知らせる意味を込めて、平易な言葉で作成しました。とくに前文には賀川の差別性を忘れないという思いを込めて「歴史を検証」という一文を加えました。この言葉は、過去における深い反省と未来に向けた大きな希望をもって紡ぎ出されています。



現在の賀川記念館・神戸イエス団教会
神戸イエス団と賀川豊彦

を余儀なくされ、神戸生田川伝道教会（現神戸イエス団教会）となり、戦後は法人法によって、社会福祉・学校・宗教の3法人として、役割を分担することになりました。現在、学校法人の教育機関1校、社会福祉法人では、2府5県にわたり40近い施設があります。一方、3法人は使命を共有し協力しながら、現在に至るまで地域に根付いた働きを続けています。

法人イエス団は、弱冠21歳の神学生賀川豊彦が、神戸にある貧しい地域のために身を投じたところから始まっています。1909年12月24日クリスマス前夜のことです。彼の日記『溢恩記』には、当初実行したいと願っていた事柄が箇条書きで記録されています。無料診療、無料葬儀も含まれており、地域の人々の生涯に寄り添って生きようとしていたことがわかります。賀川はすぐに「救霊団」を結成し、これを母体として働きを展開していきました。法

その後、救霊団はイエス団と改名されますが、既成の「教会」を設立することはせず、地域に根付いた事業を中心に展開していきました。これら多様な働きは、1923年9月1日に起きた関東大震災で賀川が東京へ移転したことで、神戸の仲間たちに引き継がれました。やがて時代の要請で財団法人となり、診療部門、宗教部門など役割分担をしながら、より機動的な動きを担うことになりました。

戦時中、宗教団体法で宗教部が日本基督教団へと加盟する道

▼在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協力委員会

コロナ禍における宣教を
テーマに

6月15日、オンラインにて、昨年コロナ禍で開催を取り止めた第53回在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協力委員会を、「両教会の宣教課題と宣教協力」コロナ禍における宣教」のテーマで開催した。

在日大韓基督教会からは、趙永哲総会長、中江洋一副総会長、李大宗副総会長、梁榮友書記、張慶泰副書記、申大永会計、金鐘賢宣教委委員長、許伯基関西地方会長、金柄鍋総幹事、金聖泰東京教会協力牧師（オブザーバー）が出席した。

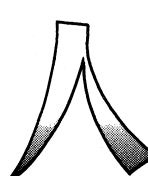
続いて、春原牧師より、「コロナ禍での教会のネット・SNS利用」と題して、礼拝（自宅から礼拝にネット参加）、交わり・学び（SNSの利用例）、伝道（教会もSNSをすべき時代）、今後の課題についての発題がなされた。

日本基督教団からは、久世そらち副議長、雲然俊美書記、岸憲秀宣教委委員長、宮本弘在日韓国朝鮮人連帯特設委員長、春原禎光柏教会牧師、秋山徹総幹事、加藤誠世界宣教幹事、大三島孝宣教幹事、石田真一郎宣教幹事、廣中佳実職員が出席した（石橋秀雄議長は教会員の葬儀のため欠席）。

趙総会長の説教「コロナ時代と信仰の姿勢」（ローマ11・36）による開会礼拝の後、出席者紹介、前回記録確認、両教会の近況および課題の報告がなされた。

次に、許牧師より、「KCCJのコロナ対策、課題など」教会の5大要素

ひととき



佐竹 昱子さん

蒔かれた種はいつか芽を出す



草加教会員、関東教区宣教部署委員、埼玉地区社会委員会会計

心は貧しさや困難の中にある人と共に。それが昱子さんの人生だ。

今では高層ビルの立ち並ぶ川崎市武蔵小杉で終戦の年に生まれ、復興期の貧しさの中で育った。父は町工場の主人で、仕事を手伝うと掛け算を教えてくれた。屑やボロを求めてやってきた外国出身の方々に、優しく対等に接する姿が印象的だった。

中学では学校の体育館でドキュメンタリー映画を見た。「蟻の町のマリア」：神父の呼びかけを耳にし、山谷クズ屋敷で人々と生活を共にするに至った若きクリスチャン女性、北原怜子の姿に接し、自らのありようを恥じた。

私立で初めて短大から大学に改組された聖路加看護大学に1期生として入学。卒業後は隣の聖路加国際病院へ。当時病院は看護師の労働環境を巡って揺れていた。大卒看護師と最前線される立場を捨て、仕事を教えてくれた先輩看護師らと共に、改善を求めて虐げられる道を選んだ。定年までを無役で通し、患者と向き合った。モーセのようだ。

見えない方の力に支えられ、身籠っても仕事を辞めずに産休をとる同病院で最初の看護師になった。眼科勤務だった1995年春の朝、視界が暗くなった患者が次々

コロナ禍の影響がこれほど長引くとは思っていなかった。教会をはじめ関係学校・団体・施設等では、毎日感染対策をしながら、日常の動きを担っている。もっとも私の場合は、ほとんどの会議や会合がオンラインで開催されることで、長距離を移動することによる体の負担が少なくなっただけでありたい。正直なところコロナ禍収束後には、おいても、皆が集まると共に、オンラインでのリモート参加というハイブリッド形式での会議の開催の継続を願っている。

教会においても、YouTubeによる礼拝説教の動画配信がとて好評である。礼拝説教についてはこれまでもCDを作製しているが、これはこれで、車の

ことにおいては大きな意義がある。その他、祈祷会へのオンラインでのリモート参加も好評だ。共に祈るということにおいては、「離れているけれどつながっている感」が大きい。

わたしの身に起こった
ことが

の運転中に聴くことができる。この理由で喜ばれている。

これらの視聴がそのまま礼拝出席に代わるということではないが、み言葉を届けるといふこと、また、み言葉を聴くという

（教団総会書記 雲然俊美）